

## 子宮頸部の病理(2)

## 子宮頸管無力症と子宮頸管熟化不全

竹田 純

## Summary

子宮頸管は妊娠から分娩にかけて大きくその性状を変化させる。妊娠期において子宮頸管は硬く維持されている必要があるが、分娩期においては熟化し子宮頸管は開大する必要がある。そのバランスが崩れた際には子宮頸管無力症による流産や子宮頸管熟化不全による過期産や帝王切開術といった不良な転帰につながる可能性がある。本稿では子宮頸管無力症の予知、診断、対処法や子宮頸管熟化不全の解決方法、その安全性などについて解説する。

## Key words

子宮頸管無力症  
子宮頸管縫縮術  
子宮頸管熟化不全  
分娩誘発  
プロスタグランジン

## 子宮頸管無力症

わが国は早産率が最も低い国の1つである。しかし、早産率は2005年以降大きな変化を認めていない。そのため、早産の予知や治療にはさらなる改善が必要である。早産予知に関する方法として、細菌性膣症の検索や癌胎児フィブロネクチンなどのバイオマーカーが挙げられるが、最も知られている方法に子宮頸管長測定がある。その測定時期は『産婦人科診療ガイドライン—産科編2017』<sup>1)</sup>のCQ302に言及されており、「全妊婦を対象として、妊娠18~24週頃に経陰的に子宮頸管長を測定する」とされている。しかし、自然流産既往のない妊婦で子宮頸管短縮を認めた場合にエビデンスの高い治療法がなく、また子宮頸管長スクリーニングの全妊婦への施行による予後改善に関して明確なエビデンスもないため、むしろ初産婦に対するルーチンの子宮頸管長測定を推奨しないという報告もある<sup>2)</sup>。日本人妊婦に対する大規模観察研究では妊娠20~24週の子宮頸管長が25mm未満の41.7%、20mm未満の75.0%が早産に至るとされている<sup>3)</sup>。海外では推奨していない全妊婦のスクリーニングをわが国が推奨している根拠として、Iamsらが報告した子宮頸管長短縮のリスク<sup>4)</sup>とわが国独自の多施設研究では、わが国の報告のほうが子宮頸管長の長い段階から早産のリスクが増えるということがある。これはわが国ではトレース法や腹部圧迫などにより、より正確な子宮頸管長測定を行っているため、より早期の早産予知につながっている可能性がある。

Jun Takeda

順天堂大学医学部産婦人科学講座